

廖承志研究会第五回研究会

日時：2012年2月02日（15：00～17：00）

場所：東京大学駒場キャンパス 18号館 1階メディアラボ2

参加者：王雪萍（東京大学）、杉浦康之（防衛研究所）、大澤武司（熊本学園大学）、山影統（早稲田大学）、戴振豊（東京大学）

研究報告：

報告者：劉建平（中国伝媒大学）

報告題目：「『廖承志時代』をどう理解するか―戦後中日関係の情報政治学」

司会：王雪萍（東京大学）

コメンテーター：大澤武司（熊本学園大学）

報告内容：

劉氏より、戦後中日関係における「廖承志時代」とその特徴である「人民外交」についての報告がなされた。特に、これまで肯定的な評価を受けることの多かった「人民外交」を「日本利益に偏重していた」ものとして捉え、「国際共産主義運動イデオロギーの下で『日本人民』が利益追求の情報を中国に伝達して一方通行的に利益を実現させてきた過程である」としている。この原因としては、中国の対日外交体制は民意表出が欠けており、加えて中国が「日本国民」を「日本人民」と誤認したことを指摘している。そして、日中国交正常化のプロセスを、中国の対日外交の「日本人民と日本政府を区別する」というイデオロギー的前提を打ち壊し、「『人民外交』という神話を解体した」ものと位置付けている。

報告後、大澤氏よりコメントがなされた後、質疑応答の時間が設けられた。特に50年代から60年代を中心とした中国の対日政策について多くの議論が交わされた。